実を結ぶ枝　　ヨハネ 15:1-8

季節ごとに美味しい果物がありますね。今は冬ですからミカン、リンゴといったところでしょうか？最近は冬でも美味しいイチゴを食べることが出来ますね。果物の樹を見た時に私達のその実に目がゆきます。あまり枝とか幹に注目することはありません。しかし、実は樹に直接ついているわけではなく、実が着くのは枝を介してです。果物にとって枝は重要な働きをしています。

さて聖書にははっきりとイエス・キリストがぶどうの木であり、私達はその枝であると書かれています。そしてわたしの父は農夫です、すなわち神は農夫であるとも書かれています。ぶどうの木と枝との関係は切っても切れない関係と言いましょうか特別な関係です。ここでイエスは「わたしはまことのぶどうの木である」（15:1）と言っておられます。「わたしは～である」という言い方には「わたしこそ～である」「わたしだけが～である」という強い意味がこめられています。そして「まこと」とは本当の、真実なということ、つまりイエスのほかに＜まことの＞ぶどうの木は無く、イエスだけが本当のぶどうの木だということです。イエスだけが豊かなぶどうの実を実らせることができる木だということです。新しい実といういのちを与えることの出来るものだとも言えます。いのちのないものにいくら一生懸命しっかりとつながっても実を結ぶことはできません。倫理道徳の本を何百回読んでもそれで人は救われません。そこには新しい命、永遠のいのちがないからです。またつながっているものが悪いものであるなら、悪い実しか結ぶことができません。良い実を結ぶために、私たちは＜まことの＞ぶどうの木であるイエス・キリストにしっかりつながっている必要があるのです。

ぶどうは、他の木とは違って、実を結ぶためにあります。他の木でしたら、太く、強く育ち、材木や燃料として使うことができますが、ぶどうの木は、細くて弱く、材木にもなりませんし、燃料としても、すぐ燃え尽きてしまいますから、たきつけ程度にしかなりません。材木や燃料にならなくても、盆栽のように鑑賞用に植えられる木もあり、その枝振りが誉められたり、花が好まれたりしますが、ぶどうの場合は、その枝ぶりがほめられることはまずありません。ぶどうは実を結ぶために植えられ、植えた人は、実を期待し、その実を誉め、喜びます。同じように、ぶどうの木につながっている枝、つまり、イエス・キリストを信じ、クリスチャンに期待されているのは、実を結ぶことなのです。

さて聖書が示している実には様々な種類があります。内面的なことに関係する「御霊の実」もあれば、人々を助けるための良い行いという実、救われていく伝道の実ということもあります。今日は特に「御霊の実」を取り上げたいと思います。それは、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」（ガラテヤ 5:22～23）というものです。みなさん、良く聞かれたことがあると思います。これらの御霊の実についてもう少し丁寧に分けて考えますと最初の三つ「愛、喜び、平安」は神との関係において結ぶ実、次の三つ「寛容、親切、善意」は人との関係において結ぶ実、最後の三つ「誠実、柔和、自制」は自分との関係において結ぶ実であると言われます。確かに「愛、喜び、平安」はどれも私達の中にあるのではなく神ご自身がその源であるので神との関係がどのようなものであるのかということが重要となります。神との関係が深ければ深いほど愛、喜び、平和は私達の心を満たします。しかし、神との関係が浅かったり、こちらで拒否しているなら神の愛、喜び、平安は流れてくることはありません。つぎに「寛容、親切、善意」とは神との関係ではなく、人との関係です。神に対して親切に接していきましょうなどとは言いません。それらは人間関係の中で示される実です。しかし、このような人間関係も元はと言えば神が与えてくださる「愛、喜び、平安」があるからこそであり、その結果、人に対して寛容であったり、真心からの親切や善意を示すことが出来るのです。そして最後には「誠実、柔和、自制」という実ですがこれ

らのものはある程度自分が見えていないと出てくるものではありません。そして自分の本当の姿を映し出してくれるものを持つ時に自分の本当の姿が見えてきます。私たちが自分が如何にいい加減で、すぐに怒りやすく、また自分で自分を制することの出来ない者であるかが本当に分かるのは神の前に出る時です。人と比べてではありません。ナルシスト（自己愛が強い人）でも分かりません。神の前でそれが分かる時に神は誠実、柔和、自制といった御霊の実を与えてくださるのです。

さてぶどう園の農夫である神は、ぶどうの枝である私たちに実を結ぶことを願っておられますが、すべてのぶどうの枝が同じように実を結ぶわけではありません。ある枝は多くの実を結びますが、ある枝はすこししか実を結びません。ひとつも実を結ばない枝もあるでしょう。ぶどう園の農夫である父なる神がぶどうの枝である私たちに実を結ばせるためにどのように取り扱われるのかを見ておきたいと思います。

もし、あなたが、実をむすばない枝であったなら、神は、どうなさるのでしょうか。「わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き…」（2 節）とあります。実を結ばない枝は取り除かれるというのですが、これは、大変厳しいことばです。しかし、私たちの父なる神は、あわれみ深いお方で、私たちが実を結ぶことができなかったからといって、すぐに私たちをお見捨てにはなりません。ルカ 13:6〜9 にこんなたとえがあります。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』」ここで実を結ばないいちじくの木はイスラエルのことで、これは、神がイスラエルに対してどんなに忍耐深くあられたかを教えているたとえ話です。このたとえ話の中で、神は実を結ばない木をほっておかれたのではなく、それがなんとか実を結ぶようにと、木のまわりを掘り、肥料を与えました。神は、実を結ばないぶどうの枝にも同じようにしてくださるのです。ある説教家は、「わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き…」とある箇所の「取り除き」と訳してあることばを「持ち上げる」という意味に解釈しています。「取る」（take）という言葉ですが取り去るとも言えますし、手をかける、責任を取る、引き受けるとも訳せることばです。彼が、「持ち上げる」と解釈したのはこういう理由です。ぶどうの枝は、ほうって置くと、地面にさがって行き、そのためにほこりをかぶったり、水に濡れたままになって、実を結ばなくなるのだそうです。ぶどう農家の人はそんなぶどうを切り取ってしまうのではなく、そういう枝も実を結ぶようにと、その葉についた泥を洗い、枝を持ち上げて、ささえてやるそうです。神は、実を結ばないでいる者たちをあわれみ、この世という地面で、罪の泥にまみれている者を洗い、きよめ、そうした人々を、恵みによって持ち上げてくださり、信仰という支えを与えて、実を結ぶ者となれと、語りかけてくださっているのです。神が、実を結ばない者を何度も心にかけそれを世話されるということは、イエスが教えておられるところです。時には泥を洗い、枝を持ち上げて下さるということが心地良いというより、むしろ厳しく辛いことのように、また懲らしめのように思われることもあります。しかし神は私たちを取り除いたり、落とすためではなく、持ち上げるためにそうしてくださるのです。「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結

ばせます。」ヘブル 12:11　必要なことは神に愛され、実を結ぶことを期待されているからこその訓練であり、懲らしめであるという信仰が必要とされています。

次に実を結ぶ枝に対する神の取り扱いを見ましょう。「実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。」(2 節)と言われています。ぶどう園の農夫である父なる神は、実を結ばない枝に手をかけるだけでなく、実を結ぶ枝にも、もっと実を結ぶために手を入れるのです。イエスはそれを「刈り込みをする」という言葉で表わしています。ぶどうはあまりに茂りすぎますと、光が入ってこなくなり、大きくて甘く、おいしい実をならせることができません。農夫は、刈り込みによって余分なものを取り除いていくのです。

神はそのように、私たちの人生にも、手を入れ、刈り込みをなさいます。「私は、これだけの実を結んでいるから、もう大丈夫。」と言うことのできる人はいないのです。神は、もっと多くの実を結ばせるため、あるいはもっと大きくて、おいしい実を結ばせるため、実を結んでいる人々の人生にもいろいろな形で手を入れてくださるのです。神がなさる「刈り込み」にはいくつかの方法があるでしょうが、そのひとつは、神が、私たちが惜しいと思うようなものを思い切って捨てるように命じられることです。神の祝福によって私たちは経済的に恵まれたり、教会での奉仕によって霊的な賜物をいただいたり、多くの人々との親しい交わりを与えられたりします。それらは、どれも素晴らしいものです。罪や悪であるなら、捨てなければいけませんが、こうしたものは手放す必要はないし、手放したくないと誰もが思います。しかし、私たちは、いつしか、こうした神の恵みに甘んじてしまって、心地良さに安住してしまうことがあります。そのために、本当はもっと多くの実を結ぶことができるのに、ある一定の実りだけで満足してしまうことがあります。神学生として東京にいた時に近くの教会の牧師は若い時に神風特攻隊として出発する何日か前に終戦になり、それからクリスチャンそして牧師になったという経歴の持ち主でした。その先生は教会の役員を任命する時に「あなたは会社で出世することや多く稼ぐことをあきらめて下さい」と言ったと言います。それが全く良いこととは言えませんがその先生の信念としては本当により豊かな実を結ぶためにはそのような心がまえが必要であると確信しておられたのです。神は、私たちに「より良い」ものを与えるために「良い」ものを捨てるようにチャレンジされることがあります。「ベスト」なものを与えるために「ベター」なものを捨てるよう言われることがあるのです。あなたの人生で「刈り込み」を受けなければならないものは何でしょうか。財産でしょうか、時間でしょうか、能力や賜物でしょうか、地位や名誉でしょうか、あるいはささやかなプライドかもしれませんね。「刈り込み」も、こらしめと同じように「痛み」が伴います。「懲らしめ」は、実を結ばない人が実を結ぶためになされるものですが、「刈り込み」は、実を結んでいる人がもっと豊かな実を結ぶためのものです。「懲らしめ」も「刈り込み」も神は、私たちが日ごと励んでいることにもっと深い意味を与えるため、そのことに手を入れてくださるのです。

神は私たちが豊かな実を結ぶことを期待し、願っておられます。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。」(5)と主は言われます。もし、あなたがまだしっかりとキリストにつながっていないなら、まず、キリストにつながることが大切です。次にキリストにつながっているのに、実を結んでいないなら、神があなたが実を結ぶようにそこから引き上げようとしておられることを受け入れてください。すでに実を結んでいるなら、もっと多くの実を結ぶために、神の刈り込みを受け入れましょう。祈ります。